

止むなきに至った。

水上氏は、国を治むるは耕すことなり、とし第四次の基幹開拓団、次に佐藤修団長から青少年義勇軍の訓練所教師に任ぜられた。

その後、新京に出て一からやり直しというわけで新京法政大学に入り、昭和二十年三月経済学部を卒業した。ところが三月十一日ハルビン第一七七部隊に入隊せよとの召集令状が来た。入営直ちにハルビンより朝鮮半島を縦断、釜山から門司にわたり熊本の子備士官学校で戦略戦術を習得の勉強で、彼は成績最優秀で恩賜の賞を受ける光栄に浴し陸軍少尉に任ぜられた。やがて京都師団に配属したばかりで終戦となった。

終戦後、出身は石川県であるが、異郷とはいえず住みついた京都市であるところから、昭和三十年、京都市會議員に立候補して当選以来、連続五回当選、その間副議長に就任、その傍ら京都府私学退職金財団理事長、京都府日中友好協合理事長、京都市選挙委員長などを歴任して藍綬褒章、勲四等の受賞に浴した。現在は京都市選管委員に就任している。

彼はうそは言えない、飾ることを好まない、酒、煙草をたしなまない、それでいてユーモア、博愛心に富む、東西南北いずこに行っても個人、団体どこからも信用され、もちいられる、力量もちろんであるが自ら人徳そなわっている人物である。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

引揚げの記録

兵庫県 浜崎 豊子

新天地大陸へ

平成五年一月、私は健康で七十歳の誕生日を迎えました。私が渡満したのは昭和十四年、半世紀も前のことなのに、昨日のことのように生々しく記憶に残っています。

私は東支那海に浮かぶ離れ島で育ちました。耕地は少なく食料の乏しい半農半漁の寒村で、卒業を機に都

会に働きに出る人が多く、私の姉も渡満していましたので、私も軍属になって、国のために尽くしたいと真剣に考えていました。国のため、家のためと教育を受け、一途にそのおもいを深めるご時世でしたから。

勤務地東安

勤務先はソ満国境に近い東安営外酒保です。官舎、陸軍病院、兵舎だけが並び、舗装道路もようやく始まったばかりの辺境の地でしたが、郷里では夢想だにできなかった広漠たる平原が続き、鹽^{たばい}ほどもある大きな落日が地平線に沈む様は、形容し難い壮観でした。六月ころになると見渡す限り新緑の草原は、さながら絨毯を敷き詰めたような美しさです。日を重ねて四季の花々が競うように咲くさまはこの世の楽園だと思えました。私は生涯をこの地で暮らしたいと思っていました。

激動の時

昭和十九年春ころには関東軍の精鋭部隊は南方に移動し始め、不穏な空気が感じられました。予感は的中して職場の人にも令状が届くようになり、将来を約束

した彼も、昭和二十年五月、現地召集されました。日を追って職場の男性の数も減る一方でした。

部隊の移動に伴い、軍酒保も南下することになり、軍需物資の梱包や身辺の荷造りで忙しくなりました。

出征した彼から、外出の兵隊さんに託した便りを二度受取り、これが最後の便りとなりました。その直後私たちは掖河に移転したのです。

「私が出征でもするようになれば戦争は負ける。皆もその覚悟でいるように」と常々口にしておられた上司にも令状が来しました。家族四人を残して行かれる気持ちをおもい、自分たちのこれからのことなど考えて胸が一杯でした。

ソ連軍の侵入

上司の出征から一か月余りを過ぎた八月九日ころから、国境からの難民で掖河周辺も大混乱となりました。

東安から届いた物資の包みを解いたり、出産を控えた留守宅に手伝いに行ったり、落ち着かない状態が続きました。

十三日早朝司令部から伝達があり、避難の準備をし

て全員掖河駅に集合するようとのこと。布袋に着替えて日用品を詰め込み、貯金通帳と印鑑を身につけ、持ち合わせの現金を持って広場に向かいました。

駅前広場は足の踏み場もないほど、軍属の家族で混雑していました。

雑踏の中に親しい奥さんの顔が見えました。現金の持ち合わせの無いことを知り百円の大金をちようだいたした時のうれしさは忘れられません。すし詰めの貨車が動き出し途中何回も停車を繰り返しながらハルビン駅に到着です。

終戦

天皇陛下の詔勅放送があるので、民家にラジオを聞きに行きましたが、初めて聞くお声です。「デマに感わされるな」と叫ぶ人もいて、バラバラの情報は一層不安が募ります。駅前周辺は人、人、人でごった返していました。一か月前に召集された上司が、トラックに乗って駅前に来られました。お話によると掖河方面からの難民が着いたので部下の人の案内で夢のような再会を果たされ、家族は皆の足手まといになる

からと、ハルビンに残ることになり、私たちは敦化に向かつて出発しました。

敦化收容所の恐怖

敦化飛行場の格納庫に收容された私たちは、到着早々に競うように頭を坊主にしました。

顔に泥を塗り、男物の作業服で男のように振る舞い、自己防衛に努めました。

先着の軍人の娘さんが、ソ連兵に辱めをうけ、母娘が刺し違えて自殺したとのことでした。敦化方面にいたソ連兵は囚人で、凶悪な集団とのうわさでしたが、それを証明するような恐ろしいことが続きました。

難民に女がいないことを不審に思ったのか、護衛のはずのソ連兵は暗くなるのを待って格納庫内に入り、体を触り女と見れば外に連れ出そうとします。周囲の人たちの抵抗で難を逃れた人もおりました。

便所は四〜五メートルくらいの横溝を掘り、アンペラで囲っただけのもの、十人ぐらいつつ行列を作って、男性の護衛の中を恥も外聞も無く用足しをするのに、アンペラを破って侵入したソ連兵に連れ出された人も

ありました。

ハルビンから敦化に向かう列車では、臨月間近な妊婦がトイレ近くで車外に引きずり降ろされ、その時の悲鳴は今でも頭から離れることはありません。

九月半ころ、全員飛行場に集合させられ、各班に分けられ、私は敦化から四十里も離れた青溝子開拓団に連行されました。

死の行進

ソ連軍の侵攻と同時に避難していた開拓団の団員と共に、総勢五百人余りの大移動です。

父や夫を召集された団員の家族と、年寄りや子供を連れた難民の家族の集団です。

荷物を背負い、子供の手を引き、乳児を抱いた母親、弱り切った老人、親とはぐれて泣き叫ぶ子供、山から下りて合流した兵隊さんに、子供を殺してくれと狂ったように口走る母親などなど、さながら地獄絵を見るおもいです。

小休止に背中で冷たくなった我が子を埋めている母親の顔は無表情です。

進んでは止まりのくり返し、隊列から遅れると匪賊の襲撃を受け、荷物は略奪される、女は拉致される、只々恐ろしさに先頭集団に遅れまいと必死で歩きまわった。

護衛のためと称してソ連兵二人、通訳一人に引率され、幾日も野宿をしながらの行程で、犠牲者も多く出たと聞きました。

同じ職場の二家族も途中の部落付近で落伍されたあとで知りました。

自分の行動を省みて極限状態に身をおく者の本能だったのかと自問自答して悲しく思います。

今地図を広げて避難路を点線で結び、その長さに驚き、年老いた人、幼い子供たち、その母親の苦しみ、多くの犠牲者たち、救いようのない痛みです。

青溝子開拓団

連行された青溝子開拓団は本部を囲んで、九部落ありました。私たち職場の人も各班に分かれ、各部落に分散され、六号部落は本部に近いので各班への連絡係をするのに若い者が適任と私も六号部落に決まり出発

です。

到着早々、六号部落から一望出来る九号部落が襲撃され、畑を逃げ回る様子が手に取るように見えます。

九号部落は本部から遠く治安も悪いと聞いていましたが、現実となった今同僚の安否が気掛かりです。早速号長さんに相談して出かける準備を始めました。

八路軍往来が激しいので、月夜を選び山越えの道を教えてもらい、男一人女三人で出かけました。原住民も暴動化していて危険が一杯です。九号部落まで一里くらいの道のりを、川を渡り小高い丘近くに差しかけた時、ピカリと光るものが見えました。同行の男性から、もし八路に遭遇したら、バラバラに散って逃げるように指示されました。草むらに逃げ込み湿地に伏せた途端、銃声が頭上をかすめました。続けざまの発砲に身動きも出来ません。そのうち銃声も止み、話し声が無くなるのを待って草むらを這い出し、犬の遠吠えにおびえながら必死で逃げました。平坦な道に出たところに、荷物運搬用らしい線路があり、それに沿って走り続けようやく部落にたどり着きました。

うちの様子を窺っていると、日本語が聞こえます。

事情を話して入れてくれるよう頼んでも後難を恐れて入れてもらえません。職場の人の家を訪ねた時の安堵とうれしさ、これで助かったと涙がこみあげ友と泣き明かしました。

銃声の止むのを待って九号部落に入った男性は、八路軍に捕まり拷問を受けていました。逃げた四人が集まらないと、団員も皆殺しにするとのことで、逃げた私たちを夜明けを待って探しに来たと九号部落の団員が中国人を伴って訪ねて来ました。四人共無事でしたが、八路軍に土下座してわび、納得してもらい夕方によく釈放されました。到着早々の銃撃は山から下りて、空家で暮らしていた兵隊さんと八路が銃撃戦になり、二人が殺されたと知りました。私たちに對する八路の敵しい取り調べも納得でした。

終戦も知らず落伍してたどり着き無念の死であったことを悼まずにはいられません。

使役と学徒動員の彼

保安隊と名付けて横行する匪賊に、所持品は略奪さ

れ、着のみのままとなりました。収穫を目前にして避難した団員も農作業に狩り出され朝早くから夕方まで大豆刈りの労役でした。田舎育ちの私はみよう見真似で作業にも慣れ、良く働くとほめられ、毎日指名されるようになり空腹を満たしておりました。

六号部落に山から下りて来た学徒動員で召集された熊本の五高生がおりましたが、「彼は不要だ」と雇ってくれません。働きに出ないと食料がありません。不憫に思い私の弟だからと頼み込んで一緒に働くことになりましたが、とても不器用です。ペンを持ち学業に励んでおれば良かった彼には生地獄であったに違いなし。カラカラに乾燥した大豆の表皮は堅く、それが手の平を突きさす痛さはつらいものでした。地平線に続く終わりのない大豆畑との闘いでした。せめてもの慰めは畑で焼いて食べる大豆のおいしさ、一刻の憩いでした。

匪賊の横行におびえる日日

収穫も終わりに近づくこと治安はますます悪化し、お互いに仮夫婦を組み、昼夜を問わず現れる保安隊を逃

れるため、野宿をしたり、床下に隠れたり必死でした。

折も折、私たちが六号部隊に到着早々に集まった現地人の中に、両手指とも二本しか無い男がおり気味悪く思ったものでした。その男に好意を持たれたのか時折にぎり飯を持って来てくれたり主人はいるのかなどと聞かれた事があり、その時は到着間もない時で、「主人は出征して子供は途中で死んだ」とうそを言い、後日私は血の凍るような思いをしたのです。

件の男くだんに自分の知り合いが赤ちゃんを残して死んだので、ご飯を一ぱい食べて乳を飲ませてくれと頼まれました。断ったものうそともいえず逃げ帰り、皆に事情を話して隣家に移してもらいましたが、便所にも出られません。

使役から帰ると床下に隠れ、用足しの折は部屋の人が見張りをしてくれましたが、ある日件の男に見つかりました。

髪の毛が逆立つといいますが、サアーと音を立てたように感じました。ヘタヘタと座り込み夕方から寝込んでしまいました。

高熱が続き意識が戻った時は保安隊の出入りも激しく治安は悪くなる一方で騒然としていました。皆出払って私だけの部屋に鉄砲を持った男三人が靴のままで上がり込み、物色に来たようですが、取る物も無く、私を足蹴にして出て行きました。

その日全員を戸外に集めて、若い娘を強引に連行したのです。同僚も逃げおくれ、数人の仲間と共につらい何十年を中国で過ごすことになったのです。私たちに食料は無く、寒さは日を追って厳しさを増し私たちは眠ることも出来ません。残るも死、出るも死、相談の上、偵察に出た若者は、二回とも戻りませんでした。

吉林への脱出

最後に残った所持品を提供して下さり、団員の方々の尽力で保安隊を雇い脱出と決まりました。明朝四時までに、本部に集合するようとの伝令があり夜陰に乗じての脱出です。私は起き上がる気力も無くうつろな気持ちで皆の慌ただしさに茫然としていました。一人残ると覚悟した私を仮夫婦を組んでいた男性の厚意でその背に負われ本部まで運んでもらったのです。足首

が切れそうな痛みだけ覚えていたのに吉林到着までの道中何も記憶がありません。

三年ほど前、友人から送られた引揚記録を読んで本部から吉林までの私の空白をうめてくれました。始発駅から吉林駅到着まで、私を看病して下さい、私の発疹チフスが伝染して九死に一生を得て帰ったと記してあり、私は大勢の方々に助けられ生きて帰れたことを痛感します。同行の皆は新京に行くことになりました。

避難所の病室で

私は吉林女学校の病室に残ることになり筵三枚を買ってもらい布団がわりにして横になりました。病室は三十人くらいで満員でした。

一日二回赤いコーリヤンの粥の支給を受けましたが、食欲がありません。せめて塩でもあればと切なく思いました。空き缶を枕元に並べ、一つは粥、一つは尿器、これが私の全財産です。入口近くに石油缶で作った便器が一つ置いてありました。便器の周辺に流れた下痢便は悪臭で、私の服にも現物が浸み込んでいましたので心地よいシラミのすみかになったのかも知れません。

病室でも亡くなる人が増えました。人手が無いのか、一日も二日も死体と隣り合わせの時もありました。病室で布団を着ていた人が亡くなった時は黒っぽい布団が砂をまいたように白くなり、しばらくすると蟻の行列のように隣りに移動するのを見ました。シラミに殺されたのだと思いました。どこからわいて来るのかと思うほどの数でした。

年の瀬も迫ったある日、満鉄社員の家族の見舞いを受けましたが、その中に東安と一緒に働いた友達がおりに地獄に仏の思いでした。

大晦日には綿入れの上下を持参して下さり、晴着で新年を迎えられるというのに、起き上がることも出来ません。見舞いに来てくれた友達から病室に同僚もあり、講堂には上司の奥様や同郷の方の家族がおることも聞き心が明るくなったようでした。

同室の同僚と上司の奥様は親戚とのことで、三歳になる子供さんを背負って、毎日のように食料を運んで下さり、私も恩恵に預かっていましたので心待ちするようになりました。

一週間以上も姿がありません。住み込みで働きに行かれたのかと思いがら寂しい気持ちで待ちわびました。

死神と対座して

そのころ病室で同郷のおじさんと再会しました。奥さんが講堂で出産後母子共に亡くなり、担架を探しに来たとのことでした。

上司の奥様は子供さんが発疹チフスで急死し二三日後には後を追うように亡くなられたことも知りました。私も生きて帰れるなど思っておりませんでした。おじさんにお願ひして、私の両親への報告を頼んで別れました。それがおじさんとの最後の別れとなりました。おじさん一家七人吉林女学校講堂で死亡され生還した私が、郷里におられる母上につらく悲しい報告をすることになりました。

忘れられた難民

共同墓地に運ぶのに三十円が必要だとのうわさを耳にして私はどうなるのだろうと一途に思い悩みました。病室を運び出される時、裸にされた人もいて不審に

思ったこともありましたが、塩や味噌を買うために同室の者が衣類を売っていることも知りました。一滴の水さえ口にすることなく死んで行った人たちが哀れでありません。

女学校講堂では幼児の売買があり、他人の子をさうらって売る悪質な人もいてトラブルがあったとも聞きました。それも飢えと寒さと恐怖、極限に置かれた人間の本能なのかも知れません。

死神との別れ

凍てついた大地に雪解けが始まるころ、女学校の難民は各班に分けられ、私は市内陽明町の民家に三十余人と共に収容されることに決まり病室を後にしました。終日シラミ取りが日課でしたし、死と向かい合った何か月、私の血を吸い丸々と太ったシラミを空き缶の底でつぶす。パチンパチンと音を立てる快感だけが救いでした。

病室とも別れ、死神とも別れ、何となく生きられそうな気持ちがありました。

孤児たちとの出会い

陽明町の収容所には六歳から十四歳の孤児が四人おりました。六歳のS君は栄養失調で、水ぶくれしており終日部屋の隅で座っていました。八歳のY君は真黒い顔でやせこけていましたが、使い走りをしたり、班長さんに仕入れてもらった鉛を小さな木箱に入れ、首から紐でつるしてもらって街に売りに出かけたり、人氣者でした。九歳のKちゃんは目のパッチリしたかわいらしい女の子で元気でしたから、住み込みに出かける人に連れられ牧場に行ったこともあり、牛乳をお土産に持ち帰ったこともありました。

十五歳になるH君は、お兄さん格で働きに出ているのか部屋に常時いた記憶は無く引揚げが決まったころは中国語の通訳をしてくれ一役買ってくれました。

陽明町の五右衛門風呂に入ったのが、避難後最初で最後となりました。風呂の水は濁ってあかだからけでした。一年振りの入浴で、生き返ったようなられしきでした。

死線を越えた人々

引揚げの話も本格的になり、私は班長さんの指示で

引揚げ事務の手伝いを始めました。住み込みで働きに出ていた人たちも引揚げ準備のため、次々に帰って来ました。

狭い部屋は寝返りも出来ないほどになりましたが、帰れる喜びで皆の顔も明るく、興奮していました。私はKちゃんを家に連れて帰ることを約束しました。

隣家のTさん一家は吉林在住の方で、難民とは違い身ぎれいにしておられました。永年築いた財産を千円の現金とリュック一つしか持ち帰れなかったので、私に衣類とお金を持ち帰ってくれるよう頼まれ、引き受けた代償に、帰国用の衣類をもらい、モンペを作ったりしました。履くと小指が見える古びた運動靴、すすけた麦わら帽、これも同室の方が探して下さった帰国用の大切な必需品です。

出発の日を待つだけとなりました。

心に残る女

ソ連兵が吉林に駐屯するようになり女の外出禁止がありました。女を提供するようにとのことで、班長さんから話がありました。

陽明町で一緒になったA子さんは最初から住み込みで働きに出ていて、引揚げ準備のために帰っていました。

突然「私が行きます。私は水商売をしていたので、素人の皆さんの役に立てれば」とその役を買って出てくださいました。その後身ぎれいになって時折は部屋に帰り、寝ている私たちに食べ物を持ってきてくれたことなど忘れられない思い出です。

救われた私たちは感謝の気持ちで言葉もありませんでした。

吉林を発つ日が来ました。私は自分で歩ける喜びをかみしめコロ島へ向かいました。

引揚げ船LSTで

到着したコロ島は引揚げを待つ人たちであふれていました。伝染病発生で予定外の滞在となり待ち切れず亡くなった人もおりました。

一年余りの難民生活ともお別れして故国日本へ帰れるのです。

引揚げ船、上陸用舟艇LSTに乗り込みました。船内

は収容所同様、混雑していましたが、帰れるうれしさが込み上げます。船内で配られたコンペイ糖の入った乾パンを口にした時のおいしかったこと、星形をした美しいコンペイ糖に今でも郷愁を感じます。

船上では演芸会が催され、歌の上手な友達は船員さんと仲良くなり、日本の空気を一足先に満喫しているようでした。

様々なおもいを乗せた船は佐世保に入港しました。

伝染病が出たとのことで、一か月余り佐世保港の沖合に停泊していました。その間留守宅への手紙が許されて出した手紙の返事がいくら待っても届きません。

長野や富山の友達は次々に届き小躍りして喜んでいきます。飯島はB29の飛行路になっていたので空襲でやられたかも知れないという人がいて、字が上手で私の自慢だった母が、返事をくれないのはうわさが本当かも知れないと不安が募ります。約束したKちゃんも連れて帰れなくなりました。

弟との奇遇

昭和二十一年九月十四日、生きて日本の土を踏みま

した。Kちゃんは富山のMさんに連れられて富山に行くことになり、ホームで悲しい別れとなりました。私はひとまず市内の叔母を訪ねることにし、西駅に下車しましたが、駅前から見渡す限りの焼け跡で、住居跡も分からず、再び汽車に乗り船着き場に向かいました。当日は大時化で欠航です。

日本も食糧難で米を持って行かないと宿にも泊れないと聞き、途方にくれていた岸壁で、弟と七年振りの再会でした。

見違えるように大人になった弟は、志願で入隊し青森の基地で終戦を迎え、危うく一日違いで命拾いをして一年前復員したとのことでした。両親も健在で、戦時中弟妹たちも疎開していたことなど夜を徹して語り明かしました。

島も食糧難とのこと、Kちゃんを富山に行かせたことを悔いながら、米どころ富山でよかったとも思いました。

翌日海は荒れていましたが、超満員で出航です。ひどい酔いでふらふらになって帰宅しました。

六年振りの故郷で

吉林で新年を迎えたころから空腹を感じるようになり、いつも食べ物のことばかり考えていました。「今一番食べたいもの」「サシミ」「スシ」と、手の平に指で書いていたのが両親の元に帰って実現しました。

毎日食卓に並ぶ刺身や放し飼いの鶏をつぶしてのご馳走で、避難中の栄養失調も、右目の失明も収容所の湿性肋膜炎も一枚皮を取るように回復して行きました。

帰宅早々にTさんの衣類は北海道の住所におくりましたが、何の連絡も無く届いたのかどうか、当時物騒なご時世でしたからご年輩だったTさん一家のことが心に残りました。

島は引揚げ者であふれていました。

配給物資は砂糖にメリケン粉が多く、砂糖は十三人の大家族で大きなバケツに二杯くらいもあり、母は砂糖飴を作っていました。

外地から引揚げた人たちは何家族も同居する人もあり争い事も多く、野良仕事など初めての人たちの苦勞

はお気の毒の一語に尽きます。

芋が主食の島の生活は朝から晩までの重労働でしたが、避難のころを思えば天国でした。引揚直後に出した孤児たちへの便りは返事が来ないまま疎遠になりました。

私が引揚げた翌年、母は私の帰りを待っていたかのように安らかに永眠しました。

人であふれていた島も、職を求めて都会に出て行き島も寂しくなりました。私も職を探しに昭和二十八年故郷を後にしました。

就職難と住宅難でしたが、神戸の街は活気がありました。先輩の借家に間借りし、賃仕事の縫物で当座を凌ぎ、昭和二十九年知人の紹介で就職することも出来、以来三十一年勤務し昭和六十一年退職しました。

戦争の傷跡

その間に引揚げ孤児たちの就職の手助けもしました。私の勤める会社に就職した一人が私が避難当時連行された青薄子開拓団の遺児であったことを入社後六か月目に知った時はがく然とし、不可思議な因縁を感じま

した。

一緒に引揚げた孤児Y君に島から出した三十一年前のはがきが縁で、昭和五十一年奇しき再会を果たしました。その後いろいろの経過を得て、孤児たちを含む二十余人で再会することも出来、引揚げ後の苦難に克ち立派に成長した孤児たちには感無量でした。幼くしてつらく悲しい思いの詰まった孤児たちには今尚戦後は続いています。

Y君は避難途中、母が一歳に満たぬ妹を中国人に書き付けと共に渡した情景が目に残り離れないと言います。彼と行動を共にした人を訪ねても真相は分からず、途中で妹さんは病死したとの情報がありましたが、彼の心の中に妹さんは当時のままで生き続けます。

戦争の傷跡は深く、妹さんへの思いと共に終生癒えることはないでしょう。

青溝子開拓団と一緒に大豆刈りをしたK君も女学校の講堂で亡くなりました。生前彼が口にした宇和島竜光院前という地名を手懸りに調査を依頼し、宇和島市

からの連絡で遺族が判明し、死亡の知らせが出来ました。

折返しお父さんが、私宅を訪ねて来られた時はおどろきました。地図を頼りに尋ねて来られた事を知り、親心に感動しました。

彼の遺品も無く吉林の墓地近くの土を持ち帰ったのを少しお渡しし、涙で別れました。

後日私は、竜光院前のお家を訪ねたことがあります。が、仏間に掲げてある三人の遺影に、ただただ合掌するばかりで言葉もありませんでした。国のためとは言いながら、ご子息三人も戦死され親御さんの無念さを感じました。平和で豊かな今の日本も、尊い犠牲の上に築かれたことを忘れてはならないと思います。

【執筆者の横顔】

浜崎さんは大正十二年一月、鹿児島島の孤島で美しい島の生まれで、尋常高等小学校も青年学校二年の課程を優秀な成績で卒業。

昭和十四年五月、満州国東安市の関東軍東安酒保に

勤務となった。酒保では兵の階級などにかかわらず、全く万民平等と言った態度と言葉で対応したので、みんなから大変な人気ものであった。

昭和二十年八月八日、不法にもソ連軍が空陸両面から東安地区に侵攻してきた。

国境は日本軍が手薄だったので、無風状態の侵略となった。坊頭のソ連兵は日本人から、日本人の住宅から、どのような物でも手あたり次第ごとごとく略奪する。抵抗すれば殺傷する。女子を捕えてどこかへ連れてゆく。獣と全く同じ悪事を働くのを、日本人はただ傍観しているばかりだった。

浜崎さんは東安地区から統々とシベリア方面に連行されるのを傍観しながら、悲憤にたえなかった。とにかく日本へ引揚げるためにハルビンへと教化、吉林へと貨車や徒歩で、それから長春、瀋陽、錦州へと徒歩や貨車をみつけて乗せてもらう。そうした度に肌身に離さなかった金銭をいくらかずつ出さねば車は動かない。東安から乞食姿で、コロ島に着くまで丸々一年以上、野良犬のごとく山に野に、河川をわたり、市街地

をめぐり、全く飢餓、恐怖、酷寒、病魔をよくも克服して生きてこられたことと驚くばかりである。

豊子さんは、神仏の加護があったとしか思えないと声を詰まらるのである。

昭和二十一年九月、故郷の肉親と感激の涙雨ふるとしだった。

昭和二十八年四月神戸の運輸会社に入社し、昭和六十年まで勤務して退社。今は生活も安定し健康に恵まれ幸せである。これから公共の仕事に協力し、社会へ報恩のまことをつくす所存だと言われた。

(出引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

世紀の大戦前後(惨苦の追想)

福岡県 大 刈 猛

今年もまた八月十五日が来た。世人はこの日を終戦記念日という。この日は悲惨極まりない戦争に負けた